

修士論文

小川国夫『試みの岸』論

弘前大学院教育学研究科修士課程

教科教育専攻 国語教育専修 国文学分野 木村成希

目次

はじめに

第一章 作品について

一節 小川国夫について

二節 初出

三節 「試みの岸」各章の要約文

第二章 『試みの岸』の文体について

第三章 十吉の人物像

第四章 十吉の「運命」と〈試み〉

第五章 まとめ

おわりに

参考・引用文献一覧

修士論文要旨

一九七二年に刊行された『試みの岸』は、小川国夫の文学を代表する作品である。表題作「試みの岸」は、馬方である十吉が難破船を買収して事業を起こそうとするのであるが、盗みにあってしまい、残された借金を返済するための労働の日々の中で、犯人を知るロクと出会い、その親子を殺してしまう物語である。そこには、十吉が襲いかかる「運命」に逃げることなく立ち向かいながら、人生を苦悩して生きる姿が描かれており、その人生に対する「試み」を感じることができ、感動する作品となっている。本稿では、「試みの岸」を中心にして、この小説の読みづらさとは何か、十吉は何に悩み、どういう人間であるかという疑問を念頭に置いてその文章を読み込むことで考察していった。まず第二章でその特異な文体の特徴を考察した。「試みの岸」における文体は、説明的な描写をしないことによって、「人物」や、「物」を浮かびあがらせ、実体に近い感覚を与えるというものだと考えた。では、実体として浮かびあがる十吉とはどんな人物であるかを第三章で考察した。十吉という人物の「性質」の核に、自分が他人に影響を与えることを恐れ、そして自分自身も他人に介入されることを拒む孤独癖があることを明らかにした。また、「見守られる存在」の重要性も考察した。そしてその「性質」と向き合う姿勢が「運命」と向き合うことにつながっていると考え、「運命」に「挑戦」する十吉の思想を考察したのが第四章である。十吉が人生に対して主体的に「試み」、そして自分では抗うことのできずに襲いかかる「運命」というものに立ち向かう姿勢を、前章までを踏まえて考察した。そして第五章では、「試みの岸」がその文体によって実体を浮かびあがらせ、十吉という人間の人生を浮かびあがらせたということを述べた。そして、それが「試みの岸」という小説の特殊性であり高い価値がある所である、ということを考察した。

はじめに

小川国夫は静岡県藤枝市生まれの作家である。小川国夫は旧制志太中学校（現静岡県立藤枝東高等学校）の卒業で、私の先輩にあたる。そして小川氏は、三年に一度藤枝東高校で講演をすることになっていて、藤枝東高校の生徒は在学中に一度は講演を聴くことになっていた。もちろん私も高校一年生の時、その講演を聴かせていただいた。講演を聴いた時のことを思い起こすと、小川氏が日々を過していると感じたことや考えたことなどを、静かで淡々とした語り口で聞かせてくれたのが印象に残っている。また、話の内容が軽妙で切り口が面白い話であったことを覚えている。それでも、内容を細かく記憶していると言うよりは、小川氏の人物に興味を持ったという記憶である。しかし、そのような直接的な関係を持った存在でありながら、小説を手にとって読むということにはなかった。

二〇〇八年の夏、高校の同級生に会って話をしていると、春に小川氏が亡くなられていたことを不意に聞かされた。驚いた私は事実確認をし、それが本当である事を知った。これまで小川氏の作品を読んでおこうと思いつながら延ばし延ばしにしていたことを悔やみながら、不謹慎ながらも、ちょうど修士論文で取り上げる作品を悩んでいたところだったので、読んでみて視野に入れようと考えた。早速文庫を買って読んでみて、次第にその魅力に惹かれていった。全体的な大雑把な感想を言えば、強い光を描くと共にそれゆえの影の濃さも表している作品が多いと感じた。そして人間自体やその営みというものをしっかりとぶれずに見て、そのまま描き出すとする意志のようなものを感じた。中でも、『試みの岸』に最も興味を持った。『試みの岸』には、人間の光も影も生々しく映し出され、心の奥まで覗き込んで書き出されているような迫力を受けた。十吉、余一、佐枝子という中心人物たちの人生とはどういうものか。特に十吉の思想はどう解釈すべきか。それら人物を通して描き出されたこの小説の主題とは何か。そういう魅力ある課題を読み解いてみたいと考え修士論文で取り組むことにした。この稿で小川氏の作品の魅力、『試みの岸』の魅力、その一端でも説明することができ、伝えることができたと考えた。

第一章 作品について

一節 小川国夫について

小川国夫（1927.12.21 ～ 2008.04.08）は、静岡県藤枝町（現・藤枝市）生まれ。東京大学国文学科中退。少年時代は病弱で、絵と小説に親しんだ。戦後、旧制静岡高等学校時代の一九四七年に、カトリックの洗礼を受けた。一九五三年、大学在学中にフランスに私費留学し、単車で地中海沿岸の各地を放浪した。この体験をもとに『アポロンの島と八つの短編』（五七年）を書き、自費出版した。これを島尾敏雄が絶賛し、一躍注目されるに至った。六〇年代から七〇年代に出現してきた小川などの作家は、「内向の世代」と一括して呼ばれる。

二節 初出

一九七〇（昭和四五）年十月「試みの岸」を『文藝』に発表。前年六九年に発表された「黒馬に新しい日を」（『文学界』四月）と、七二年三月に『文藝』に発表された「静南村」を合わせて一九七二年六月に『試みの岸』を河出書房より刊行。

作品に登場してくる人物がそれぞれに共通しており、相互に関連した構成を持っていることから『試みの岸』三部作と言われる。書かれた順としては「黒馬に新しい日を」が最も早いですが、刊行時の順が「試みの岸」、「黒馬に新しい日を」、「静南村」であること、また分量的にも「試みの岸」が他の二つを合わせたくらいであり、「黒馬に新しい日を」と「静南村」はほぼ同量であることから、「試みの岸」が三部作の主要作品である。

三節 「試みの岸」 各章の要約文

要約文（二行空きのところを一つの形式段落としてまとめ、要約文を作った。）

①十吉は、馬方の父、益三郎に連れられて、馬を骨州まで引き渡しに行く。海を見た十吉は、舟方になりたいと思う。塩見の家に馬を渡した益三郎と十吉は旅籠屋へ行く。益三郎に塩見の家までの使いを頼まれ、戻ってくると益三郎はいなくなっていた。十吉は海へ行くと、つないであった伝馬船に乗り、海に出た。漁師に発見され、一緒に岸に戻る。

②十吉は難破船・第三北人丸に向かって砂丘を歩いていた。船が遠目から見ると、そこに四人の間があるのがわかった。その中の一人に満州にいた時からの知り合いの福松がいる。十吉は福松に相談しながら船の買収交渉をする。

③十吉は船を見て荒れた気持ちを引きずりながらその場を離れる。迷っているように砂丘を歩いていると、不意に馬の姿が見えた。馬を見ていると気持ちは落ち着いていく。そして松林の中で眠ってしまう。夢の中で、自分の分身の夢を見る。十吉が眼を覚ますと夕暮れで、馬がいなくなっていた。十吉は馬を探す。次第に夜になっていった。砂丘に行くと馬の姿が見えた。福松が乗っていた。十吉はそこで、福松に船の光り物が全て盗まれた事を告げる。

④十吉が起きると福松はいなくなっていた。咲や彼女らの父親と会話する。そして海を見に行く。警官に会いそうになり、観察しながら歩いていると、咲に会った。咲に大泊に行くことを話し福松の家に戻り、父親と話をして、出発する。

⑤大風駆近くで馬を停めて、十吉は池を見て休んでいた。そこへ咲が現れ、請田のおじさんの家に行きたいから乗せていってくれと頼まれる。また、話がしたいとも言われる。

⑥十吉は咲を乗せて焼津へ向かう。船のことなどを話していると、咲は十吉のことを考えていいかと言う。十吉は二人とも駄目になると言って断る。そんなことはないと言いはり、シナを作って誘惑する咲。十吉は、馬を停めて咲を舟小屋に連れて行く。

⑦十吉は大泊から帰ってきた。大泊行きは「旅費だけ損」であった。馬を預けてあった銀三のところへ行つて馬を引き取りに行く。銀三は焼津の製氷工場で働いていた。会って話すと、銀三は十吉の顔色や様子を見て自殺の心配をする。十吉は水で顔をこするって手ぬぐいの上から眼を指で押す。十吉は「自分で自分を緊めつける動作」をしないではいられなかった。銀三は焼津に泊まることを勧めるが、十吉は船のある白須賀の方が息まると言う。船のための人足への指示を銀三に頼む。

⑧十吉は大井川の橋を越えた堤と街道の角の雑貨屋に寄る。ところてんを食べ、蒟蒻と漬物を買う。出がけに火花が売っているのが目に入り、線香花火二束と電気火花を六本買う。筒の花火も買う。そのお釣りで店に入ってきた男の子におごつてやる。嬉しそうに羊羹を買う男の子を見て十吉は、「眼に映るものが、次第に普通の色を取り戻していた」という気分になる。名札に「骨州町尋常小学校三年二組」と書いてあるその子に咲の働いている紐編み屋「七色屋」まで手紙と火花のお使いを頼む。手紙には今日は行けないことと明日の夕方行くことを書いた。男の子を隣に乗せ、坂を下っていくと、男の子がブレーキを持たせってくれと言う。持たせてみる十吉だが、力が弱く勢いづいてしまう。話をしていると、男の子が十吉は負傷兵ではないかと尋ねてくる。十吉は満州で匪賊に射たれた耳の付け根の傷を見せる。もう治っているが男の子は治っていないと思い、十吉のことを「病氣にかかっているか、怪我しているかどっちかみたいだ。」と言う。

⑨十吉はカマスを運ぶ依頼主の家に荷物を下ろし、下宿へ戻った。十吉は白須賀の部落の或る家の納屋を借りて、屋根裏部屋で人足と寝泊りし、下の土間へ馬を入れて暮らすという話をつけていた。八時ころ母屋の風呂に入り、納屋から出ると、家の入り口の陰に咲がいた。風呂に入ってくるまで待ってもらおうとすると、咲は浜の船で待つと言う。咲の持ってきた夕食とお酒を飲むと、船の下に入っ腹這いになる。十吉は咲を眺めていると眠くなり、寝てしまう。そして夢を見る。起きると咲はまだしゃがんで十吉を見ていた。話したり愛撫したりしていると、十吉は「自分は自分では救えない。救ってくれるのは、ひとだ。」と考える。その後二人で火花をするが、かえって沈んだ気持ちになる。

そして男の子の話をして、十吉は泳ぎに海に入って行く。

⑩次の日、十吉が大井川の橋のたとまで行くと、昨日の男の子が待っていた。少年に案内を頼み、鋳物割りの人足の所へ向かった。作業場へ行くと、四人の男が鋳物に腰を下ろして休んでいて、十吉を見ていた。そこで敵意を表してくる男と間を取り持つ十吉の代弁者のような男と話す。敵意を表してくる男に男の子のことなどをからかわれ、頭血がのぼる。損はさせないことを言い、代弁者の取り持ちもあり話は落ち着く。そして鋳物を割るハンマーを使っていると、ハンマーが手から滑ってしまう。それが男の子の足の甲に落ち、怪我をさせてしまう。十吉は「胸が詰りそうな快さを感じ」ていた。反省する十吉だが男の子は首を振って打ち消した。

⑪十吉が大井川の堤に近づいていくと、かなり手前から、男の子が待っているのが見えた。十吉は彼を見て「また期待が適えられるようになった」と思う。十吉は自分で作ってきた松葉杖を男の子に渡す。また菓子を買ってやると言うと、梟が欲しいと言う。十吉は困るが男の子を喜ばせようと思い、川原に石を取りに行く。男の子も堤を下りてくるが、途中でよろけて滑り落ちてしまう。男の子は泣いてしまう。そして梟の居場所を教えてもらい樟に登っていき、意外と近くにいた梟に手を伸ばすが、逃げられてしまう。樟を下り堤の斜面に戻ると、男の子がいなかったので川原へ行くと、男の子は梟を追っていた。十吉もその後を追う。川の流れの真ん中にいた梟に男の子は襲いかかるが、またもや梟は逃げてしまう。しかし向こう岸の急な堤に梟はぶつかり、弱っているところを少年が登っていき捕まえる。そして羽交いにして後を追ってきた十吉に投げた。男の子と話をして、十吉が折った竹で梟をからかっていると、男の子はいなくなっていた。十吉が羽交いを外して放してやると、梟は急な方の堤の楊に飛んで行った。十吉が行くと、梟の群れがいた。卵のあるところを見つけると、十吉は竹でつついた。そして梟たちの応酬に会い竹を落とされ嘴で攻撃される。そして「虜になった」、「だれか立ち会って」欲しい、と思う。

⑫十吉は目覚めると、朝の光を感じて、救われた気持ちになった。しかしそれはつかの間で、光は無色になって視界は影に覆われた。十吉はその影を自分の影だと感じ、またその現象を自分が支配している者の影だ、と感じたこともあった。

⑬その日十吉はクレーンの柱を焼津の鉄工所へ運んでいた。骨州港で近道をして家並みの裏手へ入った。堤に出て歩いていると川口の舟止めで馬力が鯖と西瓜を積んでいた。十吉が馬力に西瓜を売ってくれと言うと、荷主の婆さんに言えと言われる。下の伝馬船に婆さんと青年がいて、二人がかりで馬方に西瓜を渡していた。年寄りの婆さんは作業が終えると、一個残しておいた西瓜を十吉に売ってくれた。婆さんは十吉の荷物を見て、船物だとわかり、法月十吉かと聞いてくる。そしていいものを見せると言って伝馬船の中で何か探す。青年に艫の船底を調べさせると、青年が真鍮のプレートを出してきた。青年は十吉の方へプレートを投げてきた。プレートは驚いた十吉の指先に当たって川に落としてしまった。婆さんはそれが十吉の難破船に付いていたものだと言げ。十吉はそう惜しい物でもないと言い馬力を引いて出発するが、豊岩まで行って川口の舟止めに引き返した。十吉は服を脱いで海に入ってしまった。そしてプレートを見つけた。十吉は岸へ上がって服を着ると馬力を引いて漁協の事務所に行った。五十がらみの事務員の男と漁船員らしい青年に先ほどの婆さんは誰かと聞くが、二人はわからない様子で、ゴーターと呼ばれる人のかみさんに聞いてみるといいと言って、紙に榎田剛太郎と書いて渡してくれた。十吉は道へ出ると、荷物と婆さんのこととどちらを先にやるか迷ったが、蛇に刺されている馬を見て、焼津に向かった。

⑭十吉が浜へ降りていくと、四、五トンの機帆船があり、二人の船大工が働いていた。揮だけの裸の大工に、十吉は久山ロクのことを尋ねた。大工は知っていると言うが、反対に十吉の素性を聞いてきた。十吉は自分の船のことで聞きたいことがあるということを話した。年配の大工が若い大工を呼び寄せて、大工は二人で何か話し始めた。十吉が待っていると年配の大工が来てロクの家を教えてくれ、歩いていけないので連れてってくれると言う。伝馬船で送ってもらう途中十吉のことや船のことを話す。

⑮道を登って行ってロクの住む部落に着くと、大工は十吉を待たせてロクを呼びに行った。しばらく

するとロクを連れて大工が戻ってきた。ロクは閉じた表情をしていて、骨州で会ったことに白を切った。話していくと、現場へ連れて行くと言うが、ロクの目は据わっていた。ロクは崖に登っていった。十吉は、犯人はロクの部落の人達で隠そうとしているのではないかと、自分の推理を話す。ロクはそうだといい、自分が張本人だと言いつくす。そして自分を警察に付きだしてくれと言う。しかし十吉は人を警察に送ることが目的ではないと言って断る。そこに二人の男がやってくる。婆さんの身内らしかったが、十吉と二人の男はけんかになってしまふ。十吉が二人を返り討ちにしてしまふと、ロクが止めた。そして二人はどこかに行ってしまった。ロクが、二人は自分の甥だと言い、十吉に謝る。そしてこっちが悪いと言って船のことは弁償すると話す。そしてロクが飯を食べていくてくれと言うので、二人はロクの家に行く。十吉はご飯を食べ、ロクの息子の半六に船を造っていた浜まで送って欲しいと頼む。ロクは泊まっていけと言うが、馬のために十吉は断る。そしてロクと十吉はロクの長男で死んでしまった佐一のことなどを話す。そうしていると、ロクに氣を遣う十吉に、なぜこき使つてやると責めてくれないのかと、ロクは泣いてしまふ。十吉は、そのことは考えさせてくれと、心の中と思い、また半六に送ってもらふことをロクに頼む。

⑩十吉は半六を待ち、棧橋の端にしゃがんで、考えていた。満州行きの時のことなどを回想して、自分に根付いていることなどを考えていた。すると突然船が現れた。そして周りの渚で二、三人が船に乗り込んで行った。目の前の船に乗っているのは半六らしかった。十吉は半六に話しかけたが、相手は返事をしなかった。背後の棧橋の付け根に人がいるのを感じた。そして腰を蹴られて海に落ちた。泳ぐうとして足を岩にぶつけた。立ち泳ぎしながら棧橋を見ると男が四人いるのがわかった。入り江の出口の方に向かって泳いで、棧橋から遠い渚へ行こうとすると影が走ってくるのが見えた。また沖へ引き返そうとしたが、浜へ上がろうと決心して浜へ向かった。そこへ半六の舟が近づいてきた。後頭部すれすれまで舟は来て、十吉は舟の方に向いて外板を押した。舟は前に進んで艫にいる半六の姿が見えた。半六は碇を投げつけたが、頭には当たらず鎖骨に当たった。十吉が碇の綱を取ろうとすると半六が素早く引き上げ、それが十吉の足に絡まって仰向けにひっくり返ってしまった。十吉は海に潜り、ケリを付ける決心をした。浜に近づく先ほどの男たちの氣配を感じたが錯覚だった。十吉は浜へ上がり服を脱ぎ、部落の方へ歩いていった。頭に輪を嵌められたような頭痛が残っていた。半六が階段を上ってきて顔を出して十吉を見ていた。十吉は近づいていき、頭を蹴った。下へ落ちた半六を追って十吉が階段を下りていくと、半六が仰向けに倒れていて、その横にロクも倒れていた。十吉がしゃがんでロクの後頭部に手を当てると、血がなまめるく髪をぬらしていた。

⑪十吉は機帆船の蔭で目を覚ました。昨夜のことが夢のことのように感じられた。次第に夢と実体的なことは離れていき、実体的なことは新聞の事件ように感じた。そのとき、船のことや労働のことは十吉にのしかかってこなく、それも新聞などの事件のことにように感じた。気分はめずらしく霽れた。

漁師が二人、機帆船にやってきた。そして、ロクと半六が死んだことを話していた。十吉は一通り話を聞いた後、見覚えのある坂を上っていった。そこでロクの甥の一人と会った。十吉とその甥は、氣を許した様子で陰しさはなかった。十吉は自分が二人を殺したことを告げる。甥は見ていたが忘れたと言い、犬でもいたことにするとする。そして人殺しなどというもんじゃなくと言う。俺たちは仲間だとも。葬式で他の仲間を紹介するとも。十吉は行けたら行くと言い、甥の傷の話をして別れる。

十吉は現場を見に海岸へ引き返した。その階段で長いことうずくまっていると、浜にロクが見えた。ロクははじめのうちはわからなく、十吉を佐一と勘違いしていたが十吉とわかる。十吉はロクが生きているんじゃないかと聞くが、もうこっち側の人間じゃないとロクは言い、後頭部の傷をさわらせる。十吉は警察へ行くと言う。しかしロクは何も思っていないから警察には行かなくていい、佐一のように海で働いてくれと頼んでくる。十吉は赦されている、感じる。そこに半六が十吉の馬を乗せて伝馬船でやってくる。十吉は半六が馬を殺そうとしていると感じ走り出す。半六は馬を無表情で殺し、また伝馬船で海へ戻って行ってしまった。十吉は馬に駆け寄ったが馬はもう手に負えない感じだった。そこにロクが来て、半六に言いつけて馬を殺させたと行って、船へ乗って海で働き、生まれ変

わってくれと言う。

⑮ 十吉は夢とうつつの間を超えていった。彼は自分の陥った状態を人ごとのように冷静に考えていた。起きて蜜柑小屋の外に出た。海の防波堤に人々が並んでいた。杉木立に入ると昨夜医者や電話を探し回った記憶が浮かんできた。杉木立を終え入り江に降りていく斜面で土砂降りに打たれた。彼は痛みや疲れを感じた。そこで咲やロクのことを考え自分の人生のことを考える。松林へ向かっていく途中に半農半漁の家に馬がつながれていた。十吉が馬に手を掛けると奥から刑事が出てきた。十吉は自分が犯人だと刑事に告げる。そして手錠を嵌められ連れて行かれるが、馬に飼料をあげてやりたいと考える。

第二章 『試みの岸』の文体について

私はこの『試みの岸』という小説を最初に読んだとき、不思議な違和感を感じた。そして、読みづらい小説、読み続けるのが苦しい小説であると思った。まず、それは自分だけなのかというのが気になり、それがこの小説を読む現代一般人の感想ではないか、という疑問が湧いた。私と同じゼミの学生にも読んでもらったが、やはり読んでいて苦しいという声が多く聞かれた。現在広く一般で読まれている小説にも難解な小説と言われているものは少なくないとは思うのだが、それとはまた異質な読みにくさがこの『試みの岸』という小説にはあると考えられる。それがこの小説の特異性ではないかと思うのだが、ではそれはどういうことか、見ていきたい。

『試みの岸』が論じられる中で、文体について多く触れられる。それが多い理由は作者小川国夫の文学的姿勢にも要因が見られるだろう。佐藤昭夫氏は次のように指摘している。

小川国夫にとって小説とは、まず何よりも、自己を〈文体〉なるものへ向って賭ける〈試み〉であり、同時にそれは宿命的な苦い〈仕事〉であるほかはない。文体への試み―それはつまるところ、自己自身への冒険であり賭けであって、この求心的内向的な志向性とそれ特有の苦渋とは、いわゆる〈昭和初年派〉に共有された世代の特質でもある。[＊]

佐藤氏が指摘するように、小川自身が「文体への試み」ということに意識を傾けている作家であることが認められ、『試みの岸』においても「宿命的な苦い〈仕事〉」として実証されているだろうと考えられる。それゆえに、どういう文体で何をしようとしているかを考察することによって、小川が『試みの岸』で何を書いたかを明らかにしようという道筋になるのだろう。しかしおそらく『試みの岸』をまず文体から考察していく論者たちも、小川がそういう作家だから『試みの岸』について文体から考えようとしたのではないだろう。『試みの岸』を読んだとき、その特殊な文体に興味・疑問を持ち、これはどう解釈すれば良いのかという課題にぶつかったのだろう。それは右に書いた私の問題意識、つまり読みづらさは何かということと元を同じくしている。そして私も、『試みの岸』の読みづらさを、その文体にあると考えた。

磯貝英夫氏は、『試みの岸』の魅力を「馬の匂いがあり、草木のいきれがあり、潮の香が存在することにある」と述べている。つまり、『試みの岸』において、香りなどの人間が実感として感じるものが、文章を読むだけで感じられるというのである。そして、「かれは、合理的、展望的な説明次元のことは極度に退化させ、物だけを、あるいは場面だけを、均衡を失したあざやかさで浮かびあがらせる」と評している。この指摘はうなずける。『試みの岸』の文体は、誰にでもわかり、情景を思い描けるような説明的な語りではなく、実際にそこにいるかのような視点で感想のように語られる。

＊ 佐藤昭夫 小川国夫「試みの岸」 解釈と鑑賞 一九七七年九月

＊ 磯貝英夫 試みの岸 国文学 一九七四年七月

次の引用箇所を例にしてみる。

彼は桶の縁で天水の氷を割り、音をさせてそれを沈めた。そして、麦糠と藁を水で掻いた。彼は冷たいのを感じていない様子だった。馬も平気だった。ただ、盛んな食欲を、十吉に感じさせるだけだった。彼がそばへ寄ると、暖かった。十吉は体を馬にくっつけて、霜の上に動く桶を見ていた。馬は鼻で桶を追い廻すようにして、飼葉を食べた。食べ終わると、元の姿勢に戻って、しばらく不思議な程動かなかった。十吉は馬の眼の真下から、そこに夜明けの経過が映るのを見ていた。

これは「試みの岸」の冒頭の場面である。これは、情景が頭に浮かび、しっかりと理解できる語りではないだろう。十吉がどのように馬に近づいて体をくっつけているのか、「馬の眼の真下から」とはどのように、「夜明けの経過」とは馬の眼に何が映っていてどのように変化していくことなのか、はつきりしていない。しかし、ここには、冬の寒さ、水や氷の冷たさがあり、それゆえに、それと対する十吉と馬の体温が感じられる。そして馬が飼葉を食べる生々しさを感ずることができ、その馬の様子をじっと見ている十吉の存在が感じられる。そして馬の潤んだ眼に映る星や、昇りつつある太陽の光を見る。それらは感じられるのであって、はつきりと説明されている訳ではない。これが、「説明次元のことば」が「退化」し、「場面」を「あざやか」に「浮かびあがらせる」語りと言っている。説明的でないことによって、その場面の印象を読者に感じさせ、客観的に情景を思い描かせるというよりも読者自身その場にいるかのように感じさせるのである。普段我々は周りの出来事を意識することなくただ無意識に感じている。それに近い印象を持たせる表現である。それがつまり実体を感じさせる文体である。この文体は、読者の無意識下で物語を経験させるのである。そして、この説明的でない文体ということが、それに慣れない読者には、読みづらさとなるのではないかと考えている。現代我々が読む多くの小説は、状況を想像しやすいように説明してくれ、心情を察しやすくなっている。だから、読んで想像してフィクションの世界を頭の中で作り上げていきながらストーリー展開を味わうという小説の読み方に慣れていると、この『試みの岸』という小説は理解できなくなり読みづらくなるのである。

ここまで、私の元の課題である、なぜ読みづらいか、ということに一応の解釈を述べてきたが、さらに付け加えたいことがある。それは右で、『試みの岸』における文体が、「物」や「場面」を「浮かびあがらせる」と述べたが、その最大の目的は、「人物」が浮かびあがってくるのではないかと、ということだ。『試みの岸』では、はつきりと物語の中心人物を据えて語られる。「試みの岸」における十吉であり、「黒馬に新しい日を」の余一、「静南村」の佐枝子である。物語の視点はそれら中心人物から決して離れることはない。つまり、「物」、「場面」が浮かびあがる時、必ずその中心人物も浮かびあがるのである。人物に寄り添う形で、このような特徴の文体で語られる物語は、その「人物」を浮かびあがらせようとしていると、考えられるのではないか。「物」が実体に近づくならば、一番中心にいるその人物が実体に近づくかなければならない。私は、この小説を読むとき、その人物たちの呼吸が聞こえてくるような気がする。法月十吉が虚構の小説のコマとしての「人物」ではなくて、実際に呼吸をする「人間」のように感じられる。それがこの文体の一番の目的ではないか。「物」も実体として感じられるのであれば、描かれている中心にいる「人物」も実体として感じられる。文章によって実体を感じさせる文体が描く小説では、描かれる人物が最も実体に近づくかなければならないのではないだろうか。そうして逆に言えば、小川がこの小説で最も実体として浮かびあがせたいのは「人物」ではないだろうか。

第三章 十吉の人物像

第二章で文体について述べて、実体を浮かびあがらせるという文体で最も表現としたいのは「人物」

ではないかと結んだ。そうすると、この小説の主題を読み解くということは、その浮かびあがったへ人物」がどういう人間であるかを読み解くということになると考える。ここでは、表題作「試みの岸」の十吉の人物像を考察してみたい。

表題作「試みの岸」では、主に法月十吉という人間に焦点が当てられ、語りは三人称であるが十吉に寄り添って語られる。作者が明言しているように、この話の主人公は十吉である。十吉の見たものの、感じ方、が物語となつていのである。しかし、十吉の思想や考え方は一読して理解できるものではなく、なかなかつかみづらいものである。では、十吉とはどういう人間であるか、十吉がしたことを考えたことは何か、十吉の人物像を読み解くことで紐解いていく。

十吉が馬方としての生業を越えて手を出した難破船の買い取りは、光り物を全て一夜にして盗られたことで望みを失った。そして、船のものととの所在地であった樺太の大泊へ行くことにする。船の買収交渉を手伝ってくれた福松の家に泊まった次の日出発するが、その道中で福松の妹の咲と会う約束をする。そして大風で咲と会い、歩きながら会話していく中で十吉が自分の「性質」というものに言及する場面がある。それは咲が十吉に好意を示してくる場面である。

—— あんたのこと、しょっちゅう考えていてもいい……、と聞いた。

十吉は黙っていた。しばらくして、唐突に、

—— 咲さん、といった。

彼女は、十吉の不器用を救うように短い声と動作で応えた。

—— 駄目になります。

—— だれが駄目になるの。

—— 二人ともです。

—— あんたって、女は仕事の邪魔になるって思っちゃっている。女ってそういうもんかしら。そういう女だけなの、と彼女は涙声になった。

—— ……。

—— ねえ。

—— ……。

—— そんなふうを考えているの。

—— 解りませんが……。自分はもともと暗い性質です。だからこの性質の中へ咲さんを引き込みそんな気がするです。

咲は十吉のことを考えている、ということ十吉への好意を表すが、十吉はそれを受け入れることができない。「この性質の中へ咲さんを引き込みそんな気がする」という怖れが十吉にはあり、そうすると「二人とも」「駄目になる」と考える。十吉は自分の性質というものを「暗い」ものだと思つていて、またそれが他人に影響を与えて「引き込」んでしまうことに恐怖する。自分との関わりは悪い影響を与えてしまうと固く決め込み、それを受け入れようとしてくる他者を拒否してしまう。特に咲の好意は、好意と解っている分、自分に好意を抱いてくれるような咲に、自分の暗い性質からの影響を与えてしまうことは悪いこと、という罪の意識が強くなる。それは次の場面で詳しく述べられる。何も収穫を得ることができなかった大泊行きから帰ってきた後、十吉が寝泊りする納屋に咲が訪ねてきて二人で浜へ出て話をする場面である。

—— いい若い衆のそこへ嫁に行ってください。

—— なぜ、そんなふうにいるの。

——あんたが暗ぼった人間になるのは、矢張りよかない。

——ふふ、わたしが暗ぼった娘になりそうなの。心配しようね。

彼女の口調は、乾いていて、齒切れよかった。十吉は、その口調の中へ恥が解消しそうな気がした。彼は、

——自分で自分は救えない。救ってくれるのは、ひとだ。ひとの言葉も聞いて見るもんだ、と心に呟いた。

しかし、彼は自分を支配している気分を見くびる気にはなれなかった。それまで執拗に付き纏っていた低い音のようなものが、どこかへ消え去っていた、などということがあり得るとは思えなかった。咲が熱からさめれば、騙されていたことを感じ、苦しむだろうと思えた。その時には、自分が汚れた人間になって、彼女の心の中に住むだろう。そうなることは、彼にとって、彼女を穢すこと——悪事だった。彼は悪を犯したくない、と思った。しかし、甕から水が溢れるように、その事態は拡って行きそうだった。彼の不安や焦りを越えたものだった。その悪は、彼が犯すとか犯さないという性質のものではなかった。

咲の純粋な明るさや好意を感じて、「救ってくれるのは、ひとだ」と、他人との交流の中で自分の心が軽くなることを納得するが、それでもまだ「自分を支配している気分」から抜け出すことはできないと言う。咲が自分に持ってくれている好意とは熱のようなものだと考え、それがさめてしまえば自分が与えた影響が「汚れ」のように咲に残るように感じる。そして、そのような影響を人に残すようなことは「悪事」であり、罪であると考ええる。自分が与える影響が必ず悪いもの、暗いもの、人が生きていく妨げになるもの、であるという認識が彼を恐怖させ、さらに暗くさせる。自分は「暗い性質」である、と真面目に考えて他人を寄せつけることができないことで、その「暗い性質」は深化し彼を「支配」するように常に彼の心の中にあるものとなっているのである。また、人と人が交流し影響しあわずに生きていくことは不可能であり、「その悪は、彼が犯すとか犯さないという性質のものではない」といことも解っている。いわば生の原罪に近い感覚で十吉はこの「自分を支配」するものと対峙しているのだ。だからこそ、「それまで執拗に付き纏っていた低い音のようなものが、どこかへ消え去っていた、などということがあり得ると思えなかった」のである。自分がどう生きようが必ず他人と出会い、影響を及ぼしあう。できれば避けたいが、それはこの世に生を受けた時点ではないことがこのだと諦めてはいる。だがしかし、そのような自分の性質が頭の中にこびりついて離れない以上、積極的に他者に接していく気にはなれないのである。それは、

——そうじゃない。あんたって一人になりたいの。一人になって考えたいのよ。

——それもあります。一人にならんと、よつく考えられんような性質です、自分は。

という咲との会話にみられるように、極力一人でいようとする孤独癖に表れる。十吉はなるべく人に頼らず、自分を取り巻く状況・局面や、自分に起こっている問題を一人で考えて乗り越えていきたいのである。仕事のことなどで人の力を借りることはあっても、相談する、自分の内面を人にさらけ出すということは絶対にしない。自分というものを他人に関わらせたくないという意識がいつもあるのである。しかしそれは周りの人間から見れば「狂気じみた意志」であり、「自殺しようなんて思やあせんらな」と心配させる性質であり、彼の「暗い性質」である。

つまり、十吉は自分を「暗い性質」と決め込み、それと向き合って生きている。そしてその性質から他人に悪い影響を与え、他人をも不幸にしてしまうと考える。それは十吉にとって耐え難い罪であり、避けたいことなので、孤独になりたがり一人で生きていこうとする。この十吉の性質は、彼の根底にあるものであり、この性質と向き合ってどう生きていくかが十吉の生きる課題となっている。

その他人と影響を及ぼし合うことを怖れ、自分の内面に入りこむことを恐がる孤独癖な「性質」は、敵意にも敏感に反応する。彼は自分に向かう敵意には敢然と立ち向かい、時に凶暴性を見せる。鋳物

工場へ人足を借りる段取りをつけに行った時も、明らかに敵意を持って接してきて、嫌味を言ってくる相手に、「十吉は拳を固めた。体の心が微かに顫えているのを感じていた。頸を振り、いびつな表情で、相手を睨んでいた。こいつがもう一言、俺の氣に触れることをいったら、俺は我慢出来なくなる、と彼は感じた。」というように、相手を「片輪に」する手前まで興奮をあらわにする。普段孤独を好み他人にいらぬ害を与えるのを怖れている十吉は、自分から他人に敵意を示すということはない。敵意であつても好意であつても、人に影響を与えることに引け目を持っているからだ。この時は、相手から明らかな敵意を十吉に向けてきた。先に述べたように彼は自分のことや内面に踏み込まれるのを嫌がる。その「性質」は、好意をも拒否するように、敵意にも同様に作用するのである。自分がどう感じるかが大切であり、自分のことは自分で判断するというその姿勢は固く、他人が口出しすることを拒む。この姿勢は敵意や蔑みを感じた時には、攻撃性として表れるのだ。

では、十吉は人と人のつながり、情というものの全てを拒むかということ。そうではない。福松の家に泊まった翌朝の福松と咲の父親との場面でわかることがある。

彼女は味噌汁と飯をよそった。十吉は伏眼になったまま、それを口へ運んだ。なにか話をしたそうに、年寄が正面から彼を見守っていた。

—— そんなに見るもんじゃない、父ちゃんは、と彼女はいった。

—— いいんです。そうしていておくんない、といって、十吉は急いで飯を搔つ込んでいた。彼は眼を上げてはいなかったが、年寄がどんな様子をしているか知っていた。緊らない顔は、水に漂っているようなのだ。十吉はそんな様子が好きだった。

—— 親爺さん、本当は俺はお前が好きなんだ。芯から好きさ、と彼は心に呟いたが、そうした氣持が自分の陥っているひどい弱氣のせいであることも、彼は感じていた。

じつと十吉を見る親爺さんを十吉はそのままいいと言い、親爺さんのことを好きだと思う。いとらしい情のようなものを親爺さんに抱くのである。なぜ咲の好意を受けられない十吉が、この親爺さんに対しては「芯から好き」とその氣持ちを受けとめることができるのだろうか。それはこの時親爺さんが十吉を見守ってくれる存在であるからだ。じつと自分を温かい眼差しで見守ってくれているのである。そういう存在が十吉にとっては有り難いのだ。親爺さんは十吉を心配しながらも「なにか話をしたそうに」「緊まらない顔」で十吉を「見守って」くれている。そうして、親爺さんは十吉の内面に及んでこない。この会話の前に、親爺さんから仕事を休んだ方がいいという忠告や、酒を勧められたりするが、それは十吉はやりわりと断っている。つまり、十吉は自分のことは自分で何とかすると考えているし、自分の性質や内面のことに触れさせたくはないが、愛情の眼差しで見守っていてくれる存在は嬉しいのである。咲は、積極的に十吉と交流し、十吉に愛を与えようとし、自分も愛を得ようとしてくるが、親爺さんはただ十吉を心配して見てくれるだけである。十吉にとってそういう存在こそ嬉しいのだ。十吉が福松の家から出発する時も、親爺さんは「彼が振り返ると、年寄が水際まで来て、こつちを見ていた。十吉が近くにいる限り、ひたすら見守るという様子だった。」と、十吉をただ見てくれている。そして十吉は五十錢銀貨を、「取って下さい。自分の氣が済まんです。」と渡すが、これは親爺さんへの感謝の表れだろう。十吉は、他人との交わりを完全に絶ち、社会や人間関係から抜け出そうとしているのではない。人間として社会で生きていく以上、情のしがらみから断ち放たれようとは思わない。絶対について回る問題であることは受け入れ、それに対峙しながらどう生きるかを自分でもがいて掴み取ろうとしている。そしてその苦しみながらも助けを求めない生き方を、見守ってくれる眼や存在は欲しいのである。その存在とは、内面に介入しあうことなく、無意に見守ってくれる存在である。ゆえに親爺さんのような存在こそが有り難いと思うのである。

それは、少年を求めて鼻の巢を襲った時にも見られる。鼻からの猛襲を浴び、『だれか立ち合ってくれんか、救ってくれなくなつていい、立ち合ってくれりゃあいい。』という悲痛な叫びをあげるのは、見守ってくれる存在を切望する叫びなのである。助けてくれようとしなくていいが、そこにいて

見ていてほしいのである。

その見守る存在の代表とも言えるべき存在が、馬である。少年の目に馬に魅せられ、馬方である十吉にはいつも馬がそばにいる。馬はものを言わず、十吉に寄り添ってくれている。馬は十吉の内面に触れてくることがなく、そこに存在してくれている。これほど十吉にとって有り難い存在はない。難破船の金目の物が盗られ、荒い言葉が出るほど心がいらつき荒れていたときを例に挙げる。

十吉は捨鉢に肩を振りながら、砂丘の中に紛れ込んだ。白い、丸っこい大波の間を長いこと歩いていた。彼はそこから出られない気がした。迷っているのか、出る意志がないのか、自分にも解らなかった。喉が渇くのを彼は忖えた。忖え続けていれば、船のことを考えてしまうことはないだろう、と思った。人心地がつくのが怖い気がした。

しかし、彼が横切ろうとした砂丘の谷間に、いきなり馬の姿が見えた。彼は意外に馬の近くにいたのだった。アオは熱し切った空気の中に嵌めこまれたみたいだった。夾竹桃の影も、背の一個所にちらばっているだけだった。それを見てしまうと、十吉は自分を誤魔化していられなくなった。眉にこびりついた汗の虹の下にアオを見ながら、彼はのろのろと歩いた。そして、荷車に縛ってある水筒の紐を解いて、喇叭飲みした。われに返って行くにつれて、樺太の人の利にさとい表情と仕種が見え、支払った金が戻ることはあり得ないと感じた。

ここでは盗難によって「捨鉢に」なり、「肩を振」る位に心が荒れていて、砂丘から「出る意志がない」と思える程ショックを受けて気が動転している。「人心地がつくのが怖い」とは、現実を受け入れてこれからのことを考えるのを怖れている心情を表している。しかし、「馬の姿が見え」、それを観察することにより、次第に落ち着きを取り戻す。「自分を誤魔化していられなくな」り、「われに返って」現実の借金のことを考えられるようになる。馬の存在が十吉の混乱を沈め、慰められる。馬はただそこにいただけだが、その存在によって普段の気持ちを取り戻すことができたのである。これが十吉と馬の関係であり、馬の存在が十吉が欲する理想の存在であることを物語っている。

第四章 十吉の「運命」と〈試み〉

ここまでで述べてきたように、十吉の「性質」とは、好意敵意に関わらず自己への他人の介入を拒み、自分のことは自分で考えて処理していくという「性質」である。自分に根差した「性質」を承知して受け入れ、向き合いながら生きていくという姿勢とも言える。その「性質」は固く、「自分を支配しているもの」として、彼の生きる根源にある問題である。しかし彼は、そこから眼を逸らさずにその「性質」と向き合い生きていく決意をしている。そしてそれは、彼の「運命」というものに対しての向き合い方にもつながるのである。「運命」を人間の意志とは関わりなくその人生を支配する力とすると、それを受け入れ、向き合いながら自分の力で切り抜けて行こうとする姿勢である。十吉は、

——俺には、金銭の損より大事なことがある。俺はこの土地で試されているさ、逃げるわけにやあ行かん。ここを漕ぎ抜かなきゃあ、運命に勝てんように思えるもん。

と言う。買い取った難破船の金目の物をすべて盗まれ、残された借金に途方に暮れるのだが、彼は逃げずに立ち向かう。少しずつでも、多額の借金を返済していこうと〈試み〉る。難破船を買うことは、十吉自身が起こした〈試み〉であった。いわばそれは自分の人生への主体的な〈挑戦〉であった。だが、その野心は突然の横やりにより先行きの見えない苦難となる。自分の意志で起こした〈挑戦〉は、自分と関わりなく何者かから与えられた「運命」として立ち塞がったのである。しかし、その「運命」からも十吉は逃げない。大泊から焼津に戻ってきた十吉は「なぜ帰って来たのだろう、もう姿をくりますことは出来ない」と考えているように現実から逃げ出すことも出来ただろうが、それはしない。

銀三に「自殺しようなんて思やあせんらな」と言われた時も「大丈夫、俺は人並になるまで、くたばりやあせん」と答える。それは、右に挙げた「運命に勝」つという意志であり、「漕ぎ抜」いた先の人生を自分自身で見定めようとする姿勢である。このように彼は、自分の「性質」から逃げず「挑戦」することで主体的に人生に立ち向かい「運命」にぶつかっていく人間なのである。

そして、ロクとの出会いが、十吉を新たな「運命」に向わせるのである。「試みの岸」終末部について考えてみたい。ロクと半六を殺してしまった十吉は、一晚経ち、落ち着きを取り戻して来たところで、次のように考える。

やがて、出来たら永久に避けたいと思っていた人間の眼が、微かに自分を惹いている気がした。

——不幸になんかならない、という咲の声が聞えた。十吉はその言葉を信じる気には到底ならなかったが、今の自分に、生きよ、と聞えて来ることには意味があると思った。

——しかし、そいつは俺の決めることじゃあない。不幸だと俺が感じることが不幸の気であったが、そんなことはない。苦しくたつていい。このまま行つて見るさ。どつかで俺以上に苦しんでいる連中のために、堪えて見せることだつてやつて見せるさ。順次にそういう衆に行き合せて欲しいもんだ。ロクさんだつてその一人だ。俺は殺しちゃったが……、と自棄気味に呟いた。

ここで、咲の好意は見守る「人間の眼」となって十吉に届いた。そして十吉に「生きよ」と言ってくれる存在となる。ここに咲がいないことによって、「眼」や「声」として十吉に届き、十吉にとって影響を与えたくないと拒んでいた存在であった咲が、見守る存在になり得たのだろう。咲の実体がないことによって存在、好意のみが届いたというべきだろうか。しかし彼の固い性質から十吉にはまだ「その言葉を信じる気には到底なれなかった」のだが、二人を殺した罪が重くのしかかっていた十吉にとつては、とても「意味があった」のである。この「生きよ」という言葉、遠い後ろから見守ってくれている「人間の眼」が十吉を支えてくれ、罪を背負って「このまま行つて見るさ」と十吉の前に進ませる力となる。「そういう衆」とは十吉を見守ってくれる「眼」の存在になる人達のことである。この場合咲がその役になってくれた。そして、十吉のことを気にかけてくれ、夢に現れて十吉を赦してくれたロクさんも「その一人」になることだろう。そしてそのロクさんを「殺しちゃった」ことが、十吉の前に進むために償うべき罪として残る。ロクさんは赦してくれたが、十吉は自分が与えた罪というものを償わなければ進めない「性質」である。十吉自身が他人からの介入を嫌がる分、他人には影響を与えたくないし、与えてしまった罪に敏感で、償おうという気持ち強い。だから、十吉は刑事に自ら犯人と名乗り出る。一つの罪を正直な行動によって償って行きたいのだ。そのときに「表情は柔和」で「彼の本来の顔」をしているのは、しっかりと正直に行動すれば罪を償うことができ、自分の中でロクさんを見守ってくれる存在に昇華していこうという意志が固まったからである。

この「試みの岸」終末の、ロクと出会って、ロクを死に至らしめてしまい、自首するという「運命」は、「運命」に「挑戦」していく十吉の「性質」をより深化させている。自首して法の裁きを受けて服役すれば、多額の借金を背負いながらも少しづつ返済して生きていこうという「試み」は全うできない。その責任は父や身内にも委ねられることになり、それは十吉の「性質」からは反する。自分の責任はどんなに重くとも自分で背負って歩いていきたいのが十吉の「性質」であり、「試み」であったからである。ここで、その「試み」は失敗したと言つていいだろう。十吉が自首する前に、「駒がこう並んでいるのは、こう動かしてきたからだ。」と思い、「だれかご破算にしてくれないかな」と考えるのが、それを意味しているだろう。しかし、それでもなお、「苦しくたつていい、このまま行つて見せるさ」と十吉は、より大きくなった困難を生き抜こうという決意をする。そして、「順次」にそういう衆に行き合せて欲しいもんだ」と、自身の「性質」の欠点を見直し、そこに他者の存在を受け入れる覚悟をも持とうとする。新たな大きい「運命」の前に立った十吉は、それを受け入れ、より深化させた「性質」で「挑戦」していこう、生の「試み」に挑んでいこうとするのである。

第五章 まとめ

第二章で、小川は〈人物〉を浮かびあがらせたかったのではないかと述べ、第三章、四章を通じて「試みの岸」の中心人物の十吉について考察してきた。ここで述べたいのは、「試みの岸」はやはり十吉という〈人物〉が実体と感じられるように描かれたと言っているのではないかと、ということである。この小説は、文章によって〈人物〉、〈物〉を実体として感じられるように描かれ、それによって〈場面〉が浮かびあがる。それは、〈人物〉をコマのように動かしてストーリーを読ませて楽しませるフィクション小説とは形態が大きく異なっていると言っているだろう。よくできたフィクション小説であれば、ストーリーの始まりから終りで時空間の世界は完結している。しかし、この『試みの岸』という小説は物語として完結していないと思える。閉じられた物語ではないと言えようか。『試みの岸』では説明される情報量が少ないことにより、時間が前後に流れていることを感じ、空間としても左右に広がっていることを感じるができる。そして読者は、十吉という人物が実際に我々の目の前にいるかのように感じながら読むことができる。それはつまり、十吉が限りなく実体に近い存在になっていることを表し、この小説が人間の人生を浮かびあがらせることに成功していると言えるのではないだろうか。そこにこの『試みの岸』という小説の特殊性があり、高い価値があるのではないかと考える。

おわりに

以上、小説『試みの岸』を、まずその文体について考察し、次に「試みの岸」においての十吉の人物像や生き方を考えてきた。穴は多々あるが、表題作「試みの岸」の読み方の一端は説明できたのではないかと思う。私自身、この修士論文を書くに当たって、十吉の「運命」に対する〈挑戦〉の姿勢に感動し、それを伝えたいと思うことが出来た。また、修士論文に取り組むこと自体によって、多くのことを考え、自分についても知り、学ぶことがたくさんあった。この作品に出会えたことをとても大切にしたい。そして、私を支えてくれた先生や家族、すべてのみなさんへ、心から感謝したい。

参考・引用文献一覧

- ・勝呂 奏 小川国夫『試みの岸』の世界 静岡近代文学 一九九六年十一月
- ・井石誠一 特集・小川国夫 舟と馬《闘う十吉》―小川国夫ノート(2)『試みの岸』論 静岡近代文学 一九九五年八月
- ・渡仲良也 〈永遠の現在〉の世界―小川国夫『試みの岸』試論 静岡近代文学 一九九七年十二月
- ・渡仲良也 〈永遠の現在〉の世界―小川国夫『試みの岸』試論(続) 静岡近代文学 二〇〇〇年十一月
- ・諸田和治 小川国夫「試みの岸」 解釈と鑑賞 一九七三年五月
- ・磯貝英夫 試みの岸 国文学 一九七四年七月
- ・小久保実 試みの岸 解釈と鑑賞 一九七七年三月
- ・佐藤昭夫 小川国夫「試みの岸」 解釈と鑑賞 一九七七年九月
- ・柘植光彦 特集・内向の世代―最後の純文学「内向の世代」作家作品ガイド―純文学の輝き 解釈と鑑賞 二〇〇六年六月
- ・渡仲良也 〈独白〉する佐枝子―小川国夫『試みの岸』第三部《静南村》 静岡近代文学 二〇〇七年十二月